



Title	大平原の小さな文化都市：作家コストラニーと世紀 転換期のサバトカ
Author(s)	岡本, 真理
Citation	ハンガリー研究. 2021, 1, p. 87-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81531
rights	
Note	ISSN: 2436-1364 (print), 2436-4932 (online)

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大平原の小さな文化都市

—作家コストラニーと世紀転換期のサバトカ

岡本真理

1. はじめに

コストラニー・デジェー (Kosztolányi Dezső 1885-1936) は 20 世紀初頭のハンガリー文学界を代表する作家であり、詩や短編および長編小説、随筆、評論そして翻訳などさまざまなジャンルで数多くの作品を著した。同じ時代に、短命ながら短編小説作家としてその名を残した作家チャート・ゲーザ (Csáth Géza 1887-1919) がいる。この二人はいとこ関係にあり、ともにサバトカというハンガリー王国南部の町の出身である。本稿では、この二人の作家が青春時代を過ごした世紀転換期のサバトカに焦点を当て、この小都市が彼らの作家としての出発点にどのような影響を与えたのかについて考察したい。まずコストラニーがその作品で故郷の町をどのように描写しているのかを調べ、さらにこの町が作家にとってどのような役割を果たしたのかを、町の歴史と先行研究における作家の青春時代の記録から探る。コストラニーが描写する主観的な風景と、実際にこの町が彼に与えた影響の間には、少なからぬ乖離があったのではないかと予想する。まず、1 章で都市サバトカの成り立ちを紹介し、2 章ではコストラニーとチャートの生涯を概観する。3 章では、コストラニーの作品にサバトカがどのように表れているかを、おもに長編小説の中に探る。4 章では、この町が作家形成に与えたものを建築文化といういわばハード面から、続いて 5 章では青春期の作家たちの人間関係というソフト面について、伝記研究から詳細に見ていく。コストラニーが「閉塞的な片田舎」として自身の作品に繰り返し登場させたこの町が、実のところは閉塞性や後進性と同時に緊密で高度な文化性を持っており、この相反する二面性をもって作家の成長期に大きな影響を与えたことを検

証する。

2. 世紀転換期のサバトカ

セルビア北部、ハンガリーとの国境から南にわずか 10 キロメートルほどの位置に、スボティツァ(Subotica)という町がある。列車でこの国境を超える時、セルビア側でパスポートに押されるスタンプに、この町の名前が記される。現在はハンガリーとセルビアの国境であると同時に、EU 圏とその外を分けるシェンゲン協定の壁ともなっている。この地域一帯は、2015 年夏のヨーロッパへの大規模な難民流入を受けてハンガリーがこの国境に 500 キロメートルに及ぶ柵と鉄条網を設置したことにより、メディアを通して世界中にその風景が知られた地域として記憶に新しい。

スボティツァは 20 世紀初頭までハンガリー王国に属し、ハンガリー語名はサバトカである（本稿ではこの時代をテーマにするため、以下サバトカの名称を使用する）。サバトカはハンガリー大平原南部のバーチカ地方に位置し、元来は市場町であった。ハプスブルク君主国時代の 18 世紀半ば、マリア・テレジアによって自由王国都市に格上げされたのを契機として発展が始まったとされる。現在の人口は、36 万人を数えるヴォイヴォディナ州の中心地ノヴィサドに比べると、約 14 万人と規模が小さい¹。しかし、20 世紀初頭ではハンガリー王国で首都ブダペシュト、セゲドに次いで人口が 3 番目に多い町であった。とはいえ、当時の首都の人口が 70 万人を超えていたのに対して、セゲドの人口は約 8 万人、サバトカのそれは約 7 万人であり、その規模の差は明白である。さらに、サバトカの人口の約半数は周辺の広大な農耕地に点在するタニャと呼ばれる個人農家に居住し、町には定期的に出入りするといった市場町の風情を色濃く残していた。ブダペシュトが事実上ハンガリーにおける唯一の大規模都市であり、セゲドもサバトカも片田舎の町の様態を脱しなかったと言える。

3. 作家コストラニー・デジェーとチャート・ゲーザ

考察に先立ち、以下ではこの大平原の町サバトカで育った二人の作家について、その生涯と作品を概観しておく。

3.1. コストラニー・デジェー(1885-1936)

コストラニー・デジェーは 1885 年にサバトカのカトリックの中流階級の家庭に生まれた。父親は数学と物理の教師で、コストラニーも学んだサバトカの高校で教鞭をとり、彼が高校に進学した時期からその校長となり、長年に渡ってその要職を務めた町の名士であった。高校卒業と同時にブダペスト大学に進学し、ハンガリー語とドイツ語を専攻しながら、大学在籍中から早くも新聞の文芸記者として作家のキャリアを築いた。最初の詩集『四面の壁のはざま(Négy fal között)』(1907)を 22 歳の時に発表している。1908 年に創刊された文芸誌「西方(Nyugat)」にも早くから詩を掲載し、ここに掲載した作品を中心に発表した詩集『哀れな幼き子の嘆き(Szegény kisgyermek panaszai)』(1910)は、初期の代表作となった。1920 年代に入ると、長編小説を次々に発表するようになる。『血に染まった詩人(A véres költő, 後に Neró, a véres költő と改題)』(1922)『ひばり (Pacsirta)』(1924)『金の虬 (Aranysárkány)』(1925)『エーデシュ・アンナ(Édes Anna)』(1926)といった長編小説では人間の心理の深層を緻密に描き、小説家としての評価を不動のものとした。最期の長編小説『エシュティ・コルネール(Esti Kornél)』(1933)では、自らの分身として“エシュティ”という人物を創造した。これは、エシュティに自身の人生を語らせる自伝的小説であると同時に、エシュティに数々の奇想天外な架空世界を体験させる空想小説でもある。この作品でコストラニーは、同時代の西欧モダニズム文学とも近い、さまざまな文体が錯綜する新たなナラティブの境地を開いた。また、200 以上におよぶ短編小説を主要紙や全国の地方紙に発表したほか、英独仏西語の古典作品や同時代の作品の翻訳も数多く、日本の短歌・和歌の翻訳と紹介（主に英独語から）でも知られる。ハンガリー・ペンクラブ会長など、作家としての社会的活動も多方面にわたった。口腔がんによる長い闘病生活の末、1936 年に 51

歳で死去した。

3.2. チャート・ゲーザ (1887-1919)

本名はブレンネル・ヨーゼフ(Brenner József)で、同名の父はコストラニー・デジェーの母親の兄にあたり、2人は2歳差のいとこ関係にある。法律家で音楽愛好家であった父親の影響を受け、子ども時代から音楽の才能を発揮するが、同時に絵画や文学の創作活動にも没頭した。14歳の頃にはもう地元紙に音楽評論が掲載されるほどの早熟な才能の持ち主であった。コストラニーに続いて高校卒業後はブダペシュトへ上京し、音楽アカデミーを受験するも不合格となり、医科部に進学したのち精神科医になった。大学生の頃から「西方」や「ブダペシュト日報」紙に音楽評論や短編小説を多数発表し、1908年に短編小説集『魔法使いの庭 (A varázsló kertje)』を発表した。しかしその後、作家としてのキャリアは長く続かなかった。やがて覚せい剤を使用し、その身体と精神への影響を克明に日記に記録し続けるようになったのである²。1908年に音楽評論『プッチーニ』、1912年には医学論文『精神疾患の心理的メカニズム』を発表したものの、麻薬による心身への悪影響により、1914年以降はほとんど創作活動に従事できなくなった。彼の作品の大半は症状が悪化する前の20代半ばまでに書かれたものであるが、それらには一貫して幻想小説的で猟奇的ともいえる作風が見られる。1919年7月に妄想や幻覚・幻聴により妻を射殺し、自らも自殺未遂を起こすという事件を起こし、精神病院に収監された。しかし、同年9月11日にサバトカの精神病院を脱走した末に大量のヘロインを服用し、32歳の若さで自ら命を絶った。

4. コストラニー作品に見るサバトカ

以下では、コストラニーの作品の中でサバトカの町がどのように描かれているのかを見ていく。

コストラニーはいくつかの作品の舞台に故郷であるこの町を選び、「シールセグ(Sárszeg)」という架空の町として描いている。「シャルセ

グ」は「泥(sár)」と「片隅(szeg)」という語でできた作家による造語であり、「泥まみれの片隅」すなわち「文明から遠く離れた辺境の地」という意味合いが込められていると窺い知ることができる³。このシャルセグを舞台にした代表作には、小さな町の片隅に寄り添うようにひっそりと暮らす老夫婦と“行き遅れ”の一人娘のあいだの共依存的で閉塞した関係を描いた長編小説『ひばり』や、同じく小さな町の高校教師が教え子たちや思春期の一人娘との信頼関係の破綻に絶望し自殺する悲劇を描いた長編小説『金の凧』がある。これらの作品では、舞台だけでなく主人公もまた作家の身内をモデルとしている。“ひばり”という愛称で呼ばれる三十代半ばの娘は、独身のまま両親と暮らす作家の妹マーリアであり、『金の凧』の主人公の堅物中年教師ノヴァークは、同じく高校教師であった父親がモデルとなっているのである。

シャルセグでは、望もうが望むまいが、誰もが誰にも日に何度も出会った。なぜなら、町の作りが、どこに行くにも必ず広場を通らなければならないようにできていたからだ。人々はほとんどあいさつというより、単に目で合図を送るだけだった。出会ったところで互いに気を遣うわけでもなく、家の中で家族の誰かを見かける時と違いはなかった。

(『ひばり』 第7章より・筆者訳)

小さな町の濃厚な人間関係は一見して穏やかであり、人々は何気ない思いやりや親しみに満ちている。その一方で、この片田舎の町が登場人物たちの人間関係における閉塞感をもたらし、孤独と絶望へと導くものとして効果的に使われている。そして『金の凧』で妻を亡くした厳格な中年教師は、続いて自身の教え子と愛娘との恋愛騒動の末に愛娘にも自分の元を去られる。これに追い打ちをかけるように、自分が落第させた生徒から恨みの暴力を受け、父としても教師としても尊厳を奪われて深く傷つくのである。

日曜日だった。

ノヴァークは、神経質な人間のほとんどがそうであるように、日常の仕事が停止し、突然沸き起こる静寂にますます人生の虚しさを感じる休日というものを恐れていた。…（中略）…人々を眺めていることに耐えられず、裏庭に入って行った。ここでは空と木の葉しか見えない。それは、美しいものが何もないここシャルセグでさえ美しかった。

（『金の風』第28章より・筆者訳）

人の目を避け、家の裏庭で切り取られたような空を仰ぎ、ひとりその美しさに見入る姿が、この小さく閉ざされた共同体における主人公の孤高の悲しみを雄弁に描き表している。

自伝的要素の強い小説『エシュティ・コルネール』においてもまた、主人公エシュティが育った町は「シャルセグ」である。高校を卒業したばかりの主人公が、初めて故郷の家族のもとを離れて一人旅の冒険に出るいきさつが次のように描かれている。

川も山もなく、通りも行きかう人も似たり寄ったりで、何日、いや何年たっても変わり映えのしないこの大平原の町から、彼は一步も出たことがなかった。昼はむせかえって砂埃が舞い、夜は長く暗かった。…（中略）…彼は自意識に目覚め、ものを見る目が育ってきたというのに、町の劇場ではろくでもない出し物しかなかったが、ほかに何もないので、それを天井桟敷の学生席で見るのだった。広い世間を見てみたいと思った。何よりも海を見てみたかった。

（『エシュティ・コルネール』第3章より・筆者訳）

こうしてエシュティは生まれ故郷を飛び出し、初めての一人旅でブダペシュトへ、そこからさらに海を目指してイタリアの港町フィウメへの冒険の旅に出るのであるが、それは高校卒業の夏に故郷の町から巣立ったコストラニ自身の体験そのものである。大平原の小さな町サバトカが「砂埃でむせかえ」る閉ざされた世界であるならば、その対極にある

のが未知の世界へ開かれた海であった。少年エシュティにとって「暗く長い夜」の町は文化的後進性を象徴し、イタリアは反対に陽の光と歌と詩にあふれた世界であった。

このように、コストラニ作品におけるサバトカは穏やかで小さな共同体であるが、乾燥した大平原のように単調で文化に乏しい町、人々は遠慮がちな情愛を湛えているが、何とはなしに息苦しい町として描かれるのである。

5. 世紀転換期のサバトカ

コストラニ作品で上述のような姿で登場するサバトカは、実際にどのような都市であったのだろうか。本章では、まずハンガリー史においてコストラニが十代を過ごした 1900 年前後がどのような時代と位置づけられるのかを考え、次にこの時代のサバトカの特徴を明らかにする。

ハンガリー史において世紀転換期の約 20 年は、しばしば「幸福な平和の時代 (boldog békeidők)」という表現で特徴づけられる。それは、これに続く 1910 年代なかばから 1920 年代が、第 1 次世界大戦と敗北、東欧諸民族の継承諸国家の誕生と革命・闘争・暴力に特徴づけられる激動の時代であることと対照的である。1867 年のアウスグライヒ以降、ハンガリーはめざましい経済成長と文化的繁栄の時代を迎え、特に大都市ブダペシュトは大規模都市計画による整備が完了し、ブルジョア市民らはカフェや劇場ほか各種娯楽場といった豊かな市民生活を享受するようになっていた。しかしそれは、やがて破綻をきたす政治社会問題を先送りにしたままの、つかの間の「平和な時代」であったともいえる。(Romsics 2010: 17)

そのような時代が始まる頃、1882 年にはブダペシュトとサバトカを結ぶ鉄道が、さらに南下してノヴィサドーベオグラードまでを結ぶ基幹交通網として開通している⁴。サバトカは、首都からはるか南に 150 キロメートル以上離れたハンガリー大平原に位置するが、コストラニが生まれた頃にはすでに汽車で首都との行き来が可能だったわけである。以下では世紀転換期のサバトカをもっとも特徴づける建築に注目し、この

町の都市としての機能と文化的な特徴について見ていきたい。

サバトカの鉄道駅を降りて駅前の公園の横切ると、すぐに町の中心広場まで延びるコルゾと呼ばれる遊歩道が始まる。これに沿ってこじんまりとした町を歩くと、多くの個性的な建築が立ち並んでいることに気がつく。まず目を引くのは、町の中心広場にある 6 本の高くそびえたつコリント式の白い柱を備えた建物である。これは 1854 年に建てられ、その後改築や焼失を繰り返し、現在もまだ当初のスタイルを残したまま改築が進められている民衆劇場(Népszínház)である（2010 年代に始まった改築計画は、経済状況の悪化のために現在中断している）。



サバトカの民衆劇場（左）と市庁舎（右） 筆者撮影

サバトカは 1779 年マリア・テレジアの時代に自由王国都市の地位を得て、町としての発展を始めたとされる。1837 年にはペシュトに初めてハンガリー語で劇を上演する劇場が建設されたが、その頃からサバトカも劇場建設と劇団の創設を計画していた。これが、1848 年革命と独立戦争挫折という紆余曲折を経て、ようやく実現したものであった (Pekár 2013: 7)。

しかし、この町を真に特徴づける建築群は、1900 年代に建てられたいわゆる世紀末建築の数々である。中心広場をはさんで劇場と向かい合うように位置する市庁舎(1908-1912 年)は、建築家コモルとヤカブ(Komor Marcell 1868-1944, Jakab Dezső 1864-1932) の共同作品である。遠くからも見える高い時計塔の足元には、赤みの強いれんがに白い曲線で縁取りした建物が、おとぎ話の中の家のような佇まいを見せている。バロック

風の尖塔に対し、建物部分は町の要請によってハンガリーの要素が取り入れられており、折衷様式を感じさせる。内部もまた、ハンガリー刺繍のような色鮮やかな花と連続模様の壁やベンチで飾られている。ハンガリー独特の民族的モチーフをふんだんに取り入れた世紀末建築のスタイルを確立した建築家レヒネル(Lechner Ödön)の弟子であるコモルとヤカブは、ハンガリー王国各地にそのメルクマールとなる建築を残したが、ここサバトカにはこの市庁舎以外にもユダヤ教会(1902年)とサバトカ商業銀行(1907年)がある。「もっとも美しいユダヤ教会」とも言われるこの教会建築は、レヒネルの工芸美術館を連想させる華やかな色合いとデザインで、内部はまたハンガリー王国内の諸民族のフォークロアのモチーフで装飾されている。広場へと続く散歩道(コルゾ)にある銀行は、トランシルヴァニア地方の民俗的要素がふんだんに取り入れられ、中でもセーケイ門をあしらった玄関が個性を放っている(Gajdos 1995: 50)。



サバトカ商業銀行(左)とユダヤ教会(右) 筆者撮影

コモル＝ヤカブと同じく 1900 年代に活躍した建築家ライヒェル(Reichle Ferenc 1869-1960)は、サバトカを拠点に活動し、この町に自らの建築事務所と自宅を兼ねた邸宅を建築した。豪華な館を意味する「ツィフラ・パロタ(„Cifra Palota”)」の俗称で知られるこの建築は、1903～4年にかけて建てられた。現在はハンガリー領事館として使用されているこの建物もまた、細部に至るまでセセッション様式の絢爛華麗な装飾が施さ

れ、当時の建築家の成功と財力が窺える(Gajdos 1995: 65)。

コストラニがサバトカの高校を卒業してブダペシュトの大学に進学するのは 1903 年のことである。つまり、彼が高校で学んでいた頃、すでに町中心部の半径数百メートルの範囲でかつてない規模の建設ラッシュが起こっていたことになる。1900 年の秋にコストラニの父親が高校の校長となり、一家は高校の建物内にあるゆったりとした校長用の住居に引っ越したが、今日も重厚な構えを見せるこの高校自体もまた、この頃ちょうど建て替え工事が進められていた⁵。遠く首都から離れた小さな町とはいえ、彼らは高校時代に町の経済的発展の勢いを日常的に肌で感じていただろうと思われる。国会議事堂やアンドラーシ通り、英雄広場など、1896 年の千年祭に向けて起こった首都ブダペシュトの大規模都市計画を追いかけるようにして、この町にも最新の建築文化が流入していたのである。地方都市にいながらにして、最先端の文化的芸術的な空気を感じることができる時代が到来していたといえるだろう。

6. 若い作家らをとりにくく人間模様

さて、サバトカ時代のコストラニをとりにくく人間関係はどのようなものであったのだろうか。本章では、学校を舞台にした同級生たちとの関わりと、家族や近しい知人との交流について見ていくことにする。

6.1. 級友と文学

コストラニとチャートが通ったギムナジウム(Szabadkai Községi Főgimnázium)は、この地方で随一の高い教育レベルを誇る機関であった。教師陣も教育のかたわら自らも文学や歴史など各々の専門分野の研究者として教科書や学術書を著すことも多かったようである。教員会議で選出された校長は、生徒にとって畏敬の対象であると同時に町の名士でもあった。コストラニの父親も、次節で詳述するように、市民の文化生活において積極的な役割を担った。

ギムナジウムには生徒たちが自主的に運営する文芸サークル(diákönképzőkör)があった。文芸サークルは 18 世紀頃からハンガリー各

地のカトリックやプロテスタント諸派の高等学校に見られ、そこでは文学好きの生徒たちが定期的に集まって古今の文学作品の朗読や翻訳を試みたり、生徒ら自ら詩や小説を書き、発表したり批評し合ったりした。また、テーマを設定した文学コンクールが学校内で定期的に企画されるのが伝統で、優秀な詩や論文に賞金が与えられた。文芸サークルは 19 世紀なかばにはペテーフィ・シャーンドルやヨーカイ・モール、また世紀末にはモーリッツ・ジグモンドなど、市民階級から近代ハンガリー文学の担い手を輩出するきっかけを作る場であった。(Szerb 1934: 304)

サバトカのギムナジウムでは、最高学年の 8 年生と 7 年生、つまり 17 ～18 歳の生徒しか文芸サークルへの入会が許可されていなかった。コストラーニはこれに不満を抱き、16 歳の時にはもうオブザーバーの許可を求め、同時に同級生数人とともに文芸誌の“真似ごと”を始めて「前進 (Előre)」と名付けられた冊子を作った。その表紙には高校の制服を着た生徒たちが剣と旗を手に立つ姿が描かれ、創刊の理念として「サバトカ中の若者の精神を守護する熱血ハンガリー青年の団体」であると謳っていた。少年たちはみなペンネームを使い、コストラーニは Csongor と称して 17 歳で迎える自身の死をテーマにした、いかにも思春期の詩人らしい感傷的な詩を書いたという。まだ 14 歳であったチャートもこれに加わり、Halmos József というペンネームで「野鴨」と題する短編を書いたが、これは判っている限り彼が書いた最初の小説である。(Dér 1980: 50-60)

「前進」は実際のところ何の政治的メッセージもない至って素朴な学校新聞のようなもので、少年たちの遊びの範囲を出るものではなかった。とはいえ、リトグラフで印刷して実際に売って回ったところから見れば、ある意味“出版ビジネス”として成り立ったともいえる。その手法は次のようであった。ある同級生の父親が刑務所の官吏をしていたことから、彼を通じて囚人たちに 50 部ほど無償で印刷させ、それを少年たちの間で売りさばいたのである。原価の紙代を差し引いた利益の 1 フォリントを手し、コストラーニ少年は“仲間たちを代表して”ひとり街はずれの売春宿に出かけたという。その体験について後に仲間たちを集めて臨場

感あふれる報告会を行ったので、少年たちはまるで自身の身に起こったことのようにみな興奮して聴いたというエピソードを、仲間の一人フェニヴェシが残している。「前進」は当初月刊誌のつもりであったが、わずか数回で立ち消えとなった。(Dér 1980:50)

コストラニーのこのような早熟ぶりや抜きん出た行動力、気性の激しさは、後の文芸サークルでの事件にもよく表れている。「前進」のあと間もなく7年生として正式に文芸サークルのメンバーとなった彼が、会合で他の生徒たちに毎回のよう激しい文学議論をぶつけて紛糾させた様子がサークルの議事録に残されている。(Arany 2017: 485-8)その中でも、コストラニーと前述のフェニヴェシ(Fenyvesi Ferenc 1885-1929)とは鋭く議論をぶつけ合う関係だった。これがエスカレートした結果、フェニヴェシへ“肩入れ”した顧問教師にコストラニーが激しい冒涇のことはを浴びせたとして、コストラニーは高校の退学を命じられ、卒業までわずか2か月を残してセゲドの高校へ移籍を余儀なくされた。しかし、卒業後も二人は末永い交流を続けた。地元に残って地方紙「バーチュ県日報(Bácsmegyei Napló)」の編集長を生涯にわたって務めたフェニヴェシは、ブダペシュトで発表されたコストラニーの作品をいち早く地元紙に掲載し続けたのであった(Dér 1980: 18-20)。

高校時代の仲間でのちに彼らと生涯にわたって交流を続けた人物には、他にムンク(Munk Artúr 1886-1955)がいる。チャートと同級生であったムンクは、チャートの影響を受けて彼と同時にブダペシュトの医科大学に進学し、卒業後は26歳でハンガリー船籍のカルパチア号で船医を務めた。このカルパチア号は、1912年のタイタニック号の沈没事件時にもっとも近くを航行していたため、数時間後には北大西洋上で救助にかけつけ、ムンク含む3名の船医がタイタニック号の生存者数百名の命を救ったのであった。その後、第1次世界大戦では従軍医としてシベリア抑留も経験したムンクは、その後帰郷してサバトカで開業医をしながら自身の数奇な体験を小説『大いなる軍人(A nagy káder)』(1930年)に著した。これは当時5版を重ねるベストセラーとなった⁶。

6.2. 家族と芸術と“甘酸っぱい”初恋

サバトカの文化生活を音楽の面から見ると、これもまた同じく世紀転換期に成熟したことがわかる。これに一役買ったのは作家らの親世代であった。チャートの父親は、弁護士でありながらチェロやバイオリンを弾きこなす大の音楽愛好家であった。父親の影響により、チャートは幼いころからバイオリニストになるべく教育を受け、その弟もまた音楽をたしなむ音楽一家であった。また、コストラニーの父親も歌を歌うことを得意とする音楽愛好家だった（コストラニー自身もピアノ演奏に生涯親しんだ）。サバトカではチャートの父が男声合唱団を立ち上げ、コストラニーの父は合唱活動に参加すると同時にその事務局の運営を担った。(Kiss 1994: 41)そこに、サバトカ市に音楽学校を設立する計画が持ち上がり、音楽学校の初代校長にラーニ (Lányi Ernő 1861-1923) が招かれたのであった。ユダヤ系ハンガリー人の指揮者兼作曲家のラーニは、幼少を西欧諸国で過ごし、ハンガリー国内を音楽活動で点々としたのち、1907年にサバトカの音楽学校の初代校長に赴任した。そのラーニが、翌年音楽学校の教育活動のかたわら創立したサバトカ・フィルハーモニー協会（市民オーケストラ）の活動に、チャートとコストラニーの父親も中心的な役割を担ったのだった。フィルハーモニーの設立記念式典では、冒頭で当時すでに詩人として名が売れ始めていたコストラニーの詩をラーニの息子が朗読し、オーケストラにはチャート父子3人も弦楽器の演奏で参加したという (Arany 2017: 129-130)。

ラーニ家と二人の作家の3家族の間には親しい交流があった。ラーニ家には彼らと同世代の子どもたちが4人おり、2人の息子は後にやはり音楽家として活躍した。長女シャロルタ (Lányi Sarolta 1891-1975)はサバトカの教員養成学校を卒業後ブダペシュトに上京し、教師のかたわら詩人として活動し、雑誌『西方』に詩を発表する数少ない女流詩人の1人となった。ハンガリー・ソビエト共和国期には労働運動に身を捧げ、捕虜交換で解放された夫を追ってソ連へ渡り、晩年はロシア語から青少年向けに詩の翻訳も行ったプロレタリアート詩人である。しかし、ラーニ家の兄弟のうち作家らともっとも深い関りを持ったのは妹のヘッダ

(Lányi Hedda)であり、彼女はコストラニーの初恋の女性として名を遺すことになる。(Dér 2002: 54-60)

ラーニ家がサバトカに越してきた 1907 年には、コストラニーはペシュトの新聞社で文芸記者の職を得て、さらに最初の詩集も発表したばかりの新進気鋭の 22 歳の詩人であった。一方ヘッダはまだわずか 14 歳の少女であったが、彼女はまず最初に知り合ったチャートに恋心を寄せ、やがて自身の詩集を携えて父のもとを訪れたコストラニーに出会ってからは、彼と相思相愛の関係になった。すでに拠点を首都に移していたコストラニーは、少女の両親に隠して文通を続け、その熱烈なラブレターの数々をこっそり配達するのはチャートとその弟の役目だったという。また頻繁に帰郷の機会も重ねた。しかし、そのような関係が 3 年も続いた頃に突然の終わりが訪れた。原因は早熟で恋多き少女ヘッダについて、何人もの町の青年との恋愛が取り沙汰されたこと、“郵便配達役”のチャートや弟までも誘惑したことであった（弟は真剣な恋愛感情を持ち、コストラニーへの従兄弟愛との板挟みに深刻に悩んだ）。この事態に激高した妹マーリアからいち早く知らされたコストラニーはすぐにサバトカに戻り、若い恋人をなじり責めた。2 人の恋愛問題は 3 家族の子どもたちと両親を巻き込んでの大喧嘩に発展したのであるが、その顛末についてヘッダと姉シャロルタ、チャートそしてコストラニーがそれぞれの立場から書簡や回想に残している。(Arany: 135-7, Kelecsényi 2004: 99-115)

コストラニーはこの後まもなくブダペシュトで出会ったハルモシュ・イロナ(Halmos Ilona)と結婚し、生涯をともにした⁷。この「サバトカの恋」は、結局のところ未熟な恋愛騒動の域を出ないかのように見えるが、青春期の一大事件として彼の心に深く刻まれたに違いない。文学的、音楽的経験と同様に、恋愛もまたこの小さな町の中の閉鎖的で濃密な人間関係の中で繰り広げられた強烈な青年期の体験となって、作家の人格形成に影響したといえるだろう。

7. サバトカ考察

7.1. 片田舎の文化的小宇宙

コストラニとチャートが高校時代を過ごした 1900 年代のサバトカは、首都から遠く離れた大平原のただ中にありながらも、時代を先取る芸術的建築が次々と建ち並び、勢いよく成長する町であった。人口は首都にはるか及ばない小さな町であるが、学校では将来の詩人たちが熱い文学論議を戦わせ、家族ぐるみの日常的で濃密な交流の中では音楽や文学を通した極めて高い水準の文化的生活が営まれていた。周囲も巻き込んだ恋愛事件もまた、強烈な恋愛体験となって人格形成に大きく影響したことは想像に難くない。

このようにしてみると、コストラニがその作品の中でしばしば皮肉を込めて「大平原の閉鎖的な田舎町」として描いた故郷の町は、実のところ、「閉ざされた、しかし高度な創造性をもった文化的小宇宙」となって、若き詩人たちを育くむ場所となったと言えるだろう。親や兄弟、従兄弟との強い絆を核とし、それを包むように級友たちや家族ぐるみの濃密な交流が縦横に織りなされる。そして、この文化的小宇宙をさらに時代の最先端の建築様式を誇るサバトカの町並みが包み込んでいたのである。

7.2. チャートの死とトリアノン

高校卒業後、コストラニはブダペシュトに上京し、二年後にはチャートも後を追うようにこれに加わった。コストラニとチャートはともに文学を志したが、その運命はやがて大きく分かれていく。次々に作品を世に出し、作家として地位を確立したコストラニに対して、前述したようにチャートは悲劇的で短い生涯を終えた。その死の翌年 1920 年には、第 1 次世界大戦を精算したトリアノン平和条約によってサバトカはハンガリーから分断され、国境の向こうの簡単に戻れない場所となった。コストラニは故郷と最愛のいとこをほぼ同時に失って深い喪失感に陥り、まもなく雑誌「西方」にチャートを追悼する詩を発表した⁸。そこで、あの世から戻ってきたもの言わぬ霊がセルビアに割譲された「キリル文字の」故郷サバトカを彷徨うという二重の孤独にさいなまれる姿

を嘆いた(Bodrogi 2010: 44-50)。チャートの死とトリアノンを境に、コストラニーにとってのサバトカは「閉塞的な田舎」と「もう元に戻らない美しい青春の地」という二面性を伴って複雑に混じりあって現れるようになるのである。

最後に、『エシュティ・コルネール』第5章に表れる故郷について触れておこう。長い一日のあと狭い屋根裏の下宿に朝帰りしたエシュティが、故郷の家族からの葉書を受け取る。大都会で多くの詩人や芸術家仲間に出会い、カフェに入り浸っては終日コーヒーを飲み煙草をふかし、文学議論と詩作、そして賭け事や売春婦といったボヘミアン生活に耽っている。そのような一日を描いた自己嫌悪と将来が見えない不安感を抱える二十歳の青年の胸に、にわかにホームシックが沸き起こるシーンである。

エシュティは何度も繰り返し葉書を読んだ。大切な人たちに一人ひとりを懐かしく思い起こした。…混沌としていた一日が今、哀しみという澱となり、沈んでいた。エシュティは震える手で葉書を胸に当て、平穏な故郷に逃げ場を求めた。そこそが自身の根が張り下ろされ、活力の源となる場所だった。

(『エシュティ・コルネール』第5章より・筆者訳)

「砂埃が舞い」「夜は暗く長い」故郷の町は、間違いなく「自身の根が張り下ろされ」た場所であることを、エシュティ青年、つまりコストラニーは遠く離れてはつきりと確かめるに至るのである。

8. おわりに

本稿では、コストラニーにとっての故郷サバトカを、その青春時代の姿と長編小説に現れる描写との乖離という点から考察した。小説の舞台としてしばしば文化のない閉塞的な片田舎の世界の表象であったサバトカは、実際は濃厚な人間関係の織りなす高度な文化的生活という刺激を作家の青年時代に与えた場所であった。今回はコストラニーの長編小説を検証したが、例えば彼の晩年の詩における故郷の描写やチャートの作

品における故郷との比較について今回触れることができなかったが、それについては今後の課題としたい。

本稿は科学研究費補助金・基盤研究（C）「国家変容と国民文学運動に関する事例研究：近代ハンガリーの文学団体とカノン形成」（課題番号 19K00498、研究代表者：岡本真理、平成 31 年～令和 5 年）を用いた研究成果の一部である。また、2019 年度ハンガリー学会（2019 年 12 月 7 日、松山大学）において行った口頭発表に大幅に加筆したものである。

注

1. 2011 年の国勢調査によると、サバトカの人口は 144,758 人。ノヴィ・サドは 2002 年の 30 万人弱からおよそ 2 割の人口増である。Vajdaság Ma 2011 年 11 月 7 日。 <https://www.vajma.info/cikk/tukor/4509/Ujvidek-lelekszama-novekedett-a-legtobb-vajdasagi-varose-csokkent.html>
2. チャートは、10 歳の頃から死に至るまで日記を書き続けた。日記には人物デッサンや楽譜も多く記され、作家の多彩な才能を窺わせる。1910 年 23 歳の時に初めて覚せい剤を使用した。それ以降の日記には、日々の覚せい剤の使用量や症状などが睡眠・食事・女性との性的関係に至るまで克明に記されている。Csáth Géza (2016), *Úr voltam rajtam a vágy. Napló jegyzetek és visszaemlékezések 1906-1914*. Magvető. ほか 2 巻。チャートの生涯に関してはこれまでまとまった伝記研究はなかったが、昨秋に Szajbély Mihály, *Csáth Géza élete és munkái*. Magvető, 2019 が出版された。
3. コストラニは「シャーラセグ」以外に、初期の作品では「シャーロシュヴァール」（「シャーロシュ（＝泥の）」「ヴァール（＝城）」）という呼称も使用した。短編小説「マーチャーシュの恋人(Mátyás menyasszonya)」(1917)では、ひょんなことで恋人が死んだと嘘をついてしまった主人公のことを町じゅうの人が心配する様子が、田舎臭い町の情景と興味本位でおせっかいだが心温かい人々の姿とともに描かれている。
4. Sínekvilága. A magyar államivasutak Zrt. pálya és hídszakmai folyóirata. 2017-1.

<http://www.sinekvilaga.hu/a-budapest-kelebia-ország-hatar-vasutvonal-tortenete>

5. チャートもまた、コストラニーより2学年下で同じ高校に通った。チャートの家族は、そこからわずか百メートルと距離を置かない同じ通りの建物に居を構えていた。チャートの生家は、医師であった作家にちなんでであろうか、現在サバトカ医師会の事務局となっている。
6. <https://sites.google.com/site/azidoharcokatujraz/home/2-szemelyes-haboruk/munk-artur-a-nagy-kader>
7. コストラニーの妻ハルモシュ・イロナは『コストラニー伝』の中で、1910年冬に2人が知り合って以降もコストラニーはヘッダを完全に忘れることがなく、1912年夏にサバトカに帰省した際には面会を求めて手紙を出したが、ヘッダはこれを拒絶したことを記している。その秋に二人は婚約し、翌春に結婚した (Kosztolányi Dezsőné 1938, 2004: 203-5)。
8. コストラニーはチャートの死後、従兄弟に捧げる詩を6編書いた (Dér 1980: 211)。この詩は死の翌年「西方」に発表された。Kosztolányi Dezső, Csáth Géza-nak. *Nyugat* 1920/9-10 sz. <https://epa.oszk.hu/00000/00022/00276/08236.htm>

また、チャートは自身の膨大な日記をコストラニーに託し、いつかそれを基に作品を書くよう依頼していた。コストラニーは『継母(Mostoha)』を戯曲と小説の両方で構想し、絶えず手を入れていたが、結局10年かかっても膨大な量の断片にとどまった。その後闘病生活が始まり、ついに完成を見ることはなかった。Kosztolányi Dezső, *Mostoha és egyéb kiadatlan művek*. Szerk. Juhász Géza. Novi Sad, Forum könyvkiadó, 1965.

参考文献

- Arany Zsuzsanna (2017) *Kosztolányi Dezső élete*. Osiris.
- Balogh Tamás (2006) A kötötté formálás igénye. Az Esti Kornél keletkezéstörténetéhez. *Tiszatáj*, dec. 81-91.
- Bazsányi Sándor (2015) „Ez tréfa?” *Kosztolányi Dezső Esti Kornéljáról -esszéfüzér*. Kalligram.
- Bodrogi Csongor (2010), „Olvasható-e a „Cirillbetűs Szabadka”?” in Bednaries Gábor

- (szerk.) „*Alszik-e a fény*” Kosztolányi Dezső és Csáth Géza művészete. Ráció kiadó.
- Bengi László (2012) *Elbeszélt halál. Kosztolányi-tanulmányok*. Ráció kiadó.
- Csáth Géza (2016) *Úr voltam rajtam a vágy. Naplófeljegyzések és visszaemlékezések 1906-1914*. Magvető.
- Dér Zoltán (1980) *Ikercsillagok [Kosztolányi Dezső és Csáth Géza]: Tanulmányok, kritikák, dokumentumok*. Újvidék, Fórum könyvkiadó.
- Dér Zoltán (1985) *Szülőföld és költője: írások Kosztolányiról*. Szabadka, Életjel.
- Dér Zoltán (2002) *Romlás és boldogság. Tanulmányok*. Szabadka, Életjel.
- Gajdos Tibor (1995) *Szabadka képzőművészete. Történeti áttekintés a kezdettől 1973-ig*. Életjel.
- Kelecsényi László (szerk.)(2004) *Akarsz-e játszani? Kosztolányi Dezső szerelmei*. Holnap kiadó.
- Kiss Ferenc (1994) *És Szabadka....*. Debrecen, Csokonai kiadó.
- Kosztolányi Dezsőné (1938, 2004) *Kosztolányi Dezső. Életrajzi regény*. Révai. Aspy stúdió kiadó.
- Pekár Tibor (2013) *Szabadka zenei élete a 19. század második felében*. Szabadka, Életjel.
- Pekár Tibor (2016) *Szabadka zenei élete a két világháború között*. Szabadka, Életjel.
- Réz Pál (szerk.) (2009) *Hajnali részegség. In memoriam Kosztolányi Dezső*. Nap kiadó.
- Romsics Ignác (2010) *Magyarország története a XX. században*. Osiris.
- Szegedy-Maszák Mihály (2010) *Kosztolányi Dezső*. Pozsony, Kalligram.
- Szerb Antal (1934) *A magyar irodalomtörténet* (11. kiadás). Magvető.
- Szilágyi Zsófia (2017) *Az éretlen Kosztolányi*. Pozsony, Kalligram.
- 岡本真理「コストラニ文学の普遍性—近代ハンガリーという普遍性の中で」『コストラニ・デジェー短篇集』コストラニ・デジェー作、岡本真理訳。未知谷、2018 年。
- 岡本真理「狂騒曲の鳴りやまぬ世界—コストラニとエシュティの時代」『エシュティ・コルネール、もう一人の私』コストラニ・デジェー作、岡本真理訳。未知谷、2019 年。